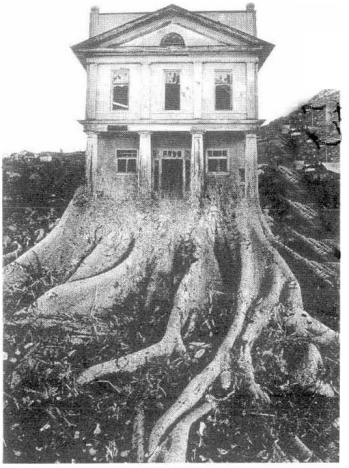
談合の病理

共同通信社社会部編

の病理

共同通信社社会部編



共同通信社

談合の病理

発行日—1994年10月19日　第1刷発行

編著者—社団法人 共同通信社社会部
© Kyodo News Service, 1994, Printed in Japan
発行人—半田拓司

発行所—株式会社共同通信社(K. K. Kyodo News Service)

〒107 東京都港区赤坂1-9-20 第16興和ビル

電話・営業部(03)5572-6021 編集部(03)5572-6016 郵便振替 00160-7-671

印刷所—大日本印刷株式会社

乱丁・落丁本は郵送料小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-7641-0329-X C0036　※定価はカバーに表示してあります。
本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き禁じられています。

はじめに

たったひとりの人間の出現が、その国の在り方を変えてしまうことがある。

強烈な個性の輝きと、比類ない能力。それが人々の心を虜にし、人々をひざまずかせる。やがて彼は権力を手にし、その国は彼なしでは動かなくなる。

一九九三年十二月二十五日、クリスマスの午後。東京・南青山の青山葬儀所。政官財界の要人ら約四千人が、戦後政界に現れた最大のカリスマに別れを告げた。

自民党総裁河野洋平（五七）が祭壇の遺影に語りかけた。

「国民はその一人ひとりが、今、有史にまれな天才政治家の面影にそれぞれの思いを胸に抱きながらご冥福をお祈りしています」

ひときわ大きな写真に納まった男は右手の人さし指をかざし、何かを熱っぽく訴えていた。汗っかきのエネルギッシュな顔。今にも聞こえてきそうなあのだみ声。戦後という時代を全速力で駆け抜けた彼の姿が参列者の胸に刻みこまれた。

田中角栄。

雪深い新潟に生まれ、裸一貫から総理大臣まで上り詰めた男。七六年のロッキード事件で東京

地検に逮捕された後もキングメーカーとして君臨し続けた男。そして政官業の「鉄のトライアングル」を完成させ、金権腐敗政治の元凶といわれた男……。

その田中がゼネコン（総合建設会社）汚職のさなかに死んだのは歴史の皮肉と言うしかない。東京地検が暴いた政官業の癒着は、田中がつくり上げた政治システムの核心であり、自民党長期単独政権の秘密だったからだ。

田中と検察はロッキード事件以後、壮絶な闘いを繰り広げた。田中は自分の息のかかった議員を法相に送り込んで検察の包囲網を敷き、検察は田中の有罪立証に組織の全力を挙げた。それは互いの存亡をかけた闘いであり、「政治」と「法」という異なるふたつの論理の相克だった。

八五年、田中が脳梗塞で倒れ、田中と検察の「十年戦争」は終わった。田中の呪縛から逃れた検察はリクルート事件で政界中枢の汚職摘発に乗り出し、田中の〝遺産〟を引き継いだ竹下政権を崩壊させた。さらに東京佐川急便事件で前自民党副総裁金丸信（七九）を政界引退に追い込み、金丸脱税事件で自民党分裂のきっかけをつくった。

リクルート事件からゼネコン汚職までの一連の事件と政治状況の劇的変化は、田中が確立した政治システムの崩壊現象だったと言っていいだろう。

田中の葬儀から約半年後の九四年七月五日。

ゼネコン汚職政界ルートの初公判が開かれた東京地裁一〇四号法廷に元建設相中村喜四郎（四四）が逮捕以来百十六日ぶりに姿を見せた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

紺のスーツにノーネクタイの白ワイシャツ。中村は裁判長に深々と頭を下げ、胸にたまった思いをぶちまけるかのように激しい言葉で検察を批判した。

「私にとって全く身に覚えのない疑惑に慄然とし、まさしくこの世の地獄を見るような思いでした……この事件は一人の政治家を二十七年ぶりの斡旋収賄罪で逮捕するためにつくり上げた冤罪であって、私は無罪であり、無実であります」

無実を訴える中村の姿は、かつて同じ東京地裁の法廷に立った田中や金丸の姿に重なって見えた。

中村は田中が政権を取った七二年に田中の秘書となり、七六年のロッキード選挙で政界にデビュー。選挙に無類の強さを発揮して「ミニ角栄」と呼ばれ、金丸の寵愛を受けながら建設族のホープとしてのし上がってきた。

中村が問われたのは埼玉土曜会事件の告発をめぐる一千万円の斡旋収賄だ。しかし、この法廷で本当に問われているのは中村個人の行為ではない。田中がつくり上げ、金丸や中村が引き継いだ利権のトライアングルであり、戦後の政官業の歴史そのものだ。

ゼネコン汚職の取材を進める中で、私たち取材班は事件の背後に潜む癒着の構造を明らかにしようと思い立った。それは限られた人員と限られた時間で戦後五十年の歴史に挑むという無謀な企てだった。

だが、蟷螂の斧も執拗に振り下ろし続ければ、巨大な壁にかすかな穴をうがつことがある。もしかしたらその穴は、私たちが生きる今という時代に通じる穴かもしれない。

談合の病理——目　次

はじめに

第1章　幻のダム疑獄　11

疑惑の入札　首相秘書官の死　隠密行動　ナゾを解くカギ
ダム王の嘆き　児玉機関　入札阻止命令　キタと名乗る男
札幌の極秘会談　暴露記事　ロワーリミットの秘密　金環蝕

第2章　利権のトライアングル　53

首相が作った談合表　三%の上納金　●インタビュー　天野光晴
党人派と土建屋　三日天下　権力の階段　建設省が育てる族議員　大臣のうまみ

第3章　巨悪への挑戦　83

特捜部の混乱　東京地検を告発する！　副部長の宿命
踏みにじられた正義　保守政権の屋台骨　指揮権発動の裏に
児玉誉士夫への手紙　スケープゴート　●資料　犬養健の手紙
点と線　広がり出した火　背水の陣　総動員態勢
秘書業務を解く　金庫番の死　検察のジレンマ

第4章　負の遺産　133

談合の系譜　天の声　静岡談合事件
負の遺産　竹林戦争　ゼネコンvsマリコン
建築談合のボス　〇・八％ルール　「広島独立王国」誕生
新都庁建設の舞台裏　●インタビュー　黒川紀章

第5章　談合秩序の崩壊　173

パレロワイヤル四〇五号室　ブツ読み　裏切り者
実弾攻勢　鹿島の焦り　クロスした言葉　告発断念
公取委vs族議員　二十七年ぶりの逮捕許諾請求　談合の病理
●インタビュー　梅沢節男　●インタビュー　井上孝

エピローグ
あとがき
資料
227
I・検察の体制表
II・中村喜四郎の逮捕許諾請求書
III・ゼネコン汚職逮捕者一覧
IV・「談合の病理」年表
V・公共工事に係る建設業における事業者団体の諸活動に関する独占禁止法の指針

装幀　亀海昌次

フォト　ジェリー・ウェルスマン

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

談合の病理

第1章　幻のダム疑獄

疑惑の入札

池田勇人が三選を目指す自民党総裁選が二カ月後に迫っていた一九六四年五月の晴れた午後。黒塗りの車が東京・四谷駅近くの新宿通りに止まった。車を降りた鹿島の副社長付き秘書原二郎（仮名）は路地を二、三分歩き、古びた木造旅館の門をくぐった。

ササの植え込みのある玄関の格子戸を開け自分の名を告げると、すぐ和服の着流し姿の男が現れた。政府出資の特殊法人電源開発の首脳だった。

「これ、渡辺からの届け物ですが」

原は、鹿島の土木担当副社長渡辺喜三郎（故人）から託された紺色のふろしき包みを渡した。

「あっそう。ごくろうさん」

男は何も聞かず無造作に受け取った。包みは厚さ十数センチ、幅約三十センチ。中身は茶色のハトロン紙に覆われていた。

「大きさからいって三千万円ぐらいの札束だったと思います。渡辺は何か非常に急いでる様子で、副社長専用の車をわざわざ出させ『この車を使いなさい。着いたら車は表通りに止め、後は歩いて行くこと。大事なものだから気を付けて』と細々と指示したんです。ふだんはそんなに細かい人ではないから、あっこれは現金だなとピンときました。秘書の私にそんなものを届けさせたの

はあの時が最初で最後でした」と、六十九歳になった原が振り返る。

当時、電源開発は北陸屈指の河川、九頭竜川（全長一一六キロ）上流に、電発最後の大規模ダムといわれた九頭竜ダムの着工準備を進めていた。十月開幕の東京オリンピック関連公共工事の発注も終わり、ゼネコン各社はこの九頭竜ダム受注をめぐり熾烈な競争を繰り広げていた。

それから九カ月後の六五年二月二十五日の衆院決算委員会。「国会の爆弾男」と言われた自民党議員の田中彰治（故人）がずんぐりした体を揺すりながら野太い声でまくし立てた。

「おかしいじゃないですか。このダムはどうあっても鹿島が取るように仕組まれてたんだ。でなきゃ、なぜほかの業者より一億円以上も高値で入れた鹿島が落札したのか」

六四年九月に行われた九頭竜ダム本体工事の入札には、電発から指名された鹿島、間組、前田建設工業、熊谷組、西松建設のゼネコン五社が参加した。

入札の結果、四十億九百八十万円で入札した間組をはじめ四社は、電発が「それ以下だと手抜きなどで適正な工事履行ができない恐れがある安全最低線」として設定したロワーリミット（最低制限価格）を下回ったため失格。これに対し四十一億三千八百万円で入札した鹿島が五社中の最高値にもかかわらず落札した。

最安値の業者を選ぶはずの競争入札で起きた不可解な逆転劇。田中は入札時の首相池田勇人が電発に圧力をかけて鹿島に受注させ、見返りに巨額献金を受けたと追及した。

電発首脳に包みを届けた原は、鹿島副社長渡辺の指示でこの衆院決算委に通い詰めた。

「知り合いの議員秘書からバッジを借りて傍聴席に入り、ハラハラしながら見てたんです。もし、うちが使った奥の手が何かの拍子でばれたら大変なことになると思いながらね」

原は副社長の渡辺から「とにかく正確な内容を取ってこい」と言われ、渡辺のポケットマネー数十万円で買ったドイツ製の小型録音機を胸に忍ばせていた。

田中の追及は執拗だった。電発の監督官庁である通産省の幹部をはじめ、九頭竜ダム入札の直前まで電発総裁だった藤井崇治、現職総裁の吉田確太、副総裁大堀弘らを委員会に次々に呼び出した。

田中はまず藤井に詰め寄った。

「藤井さん、あなたは総裁在任中に池田総理の奥さんから、鹿島に工事をやらしてくれと書いた名刺を受け取っているはずだ。どうなんですか」

「だれかが一度奥さんの名刺を持ってきたことがあると思います。思いますが、九頭竜ダムについての紹介ではなかった。九頭竜問題に関する限りそういう名刺をいただいたことはない」

藤井は全面否定した。

しかし、田中に続いて社会党議員の吉田賢一も藤井を問い詰めた。

「政界新聞『マスコミ』に『ナゾの政治献金五億円、九頭竜ダム入札に疑惑』という記事が出ている。あなたが総裁を辞めた直後の昨年九月、あなたはこの新聞の編集者、倉地武雄氏と四谷の旅館で会い、『鹿島から数億円というカネをやるから工事を請け負わせてくれと言ってきたが、僕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com